

# 西ヨーロッパと東アジアにおけるヒストリオグラフィーの アーキタイプ研究に関する資料調査

—カスリーン・ヒューズ『初期ケルト民族の歴史意識と現代の歴史家』の翻訳紹介—

佐藤 正幸

Introducing a translation of Kathleen Hughes, *The Early Celtic Idea of History and the Modern Historian: An Inaugural Lecture*. Materials regarding research on archetypes of historiography in Western Europe and East Asia

SATO Masayuki

## Abstract

Situated to the east and the west of the Eurasian continent, the British Isles and Japan both possess cultures with roots extending into the distant past. In both areas numerous genealogies have been fashioned from the seventh century, the time from which the first written materials are extant. These genealogies have played a central role in the determination of an awareness of history. This article introduces the Japanese translation of Kathleen Hughes's, *The Early Celtic Idea of History and the Modern Historian: An Inaugural Lecture*, (Cambridge University Press; Cambridge, 1977, 24 pp.). Hughes treats the era during which Christianity, a religion that served on the basis of Celtic culture, was accepted by medieval Ireland. By examining numerous genealogies, Hughes examines the development of historiography. This report introduces Hughes's work in order to foster a better understanding from a comparative perspective of the culture of genealogies and the development of historical writings in Japan.

キーワード：系図学、ケルト、歴史叙述、東アジア、西ヨーロッパ、カスリーン・ヒューズ  
key words: Genealogy, Celt, Historiography, East Asia, West Europe, Kathleen Hughes.

## 本資料調査の目的

### [1] 比較することの重要性

比較するという行為は、歴史研究に限らず、多くの学問分野において、研究対象自体の特質を認識するための出発点である。歴史認識研究の重要なテーマの一つは、日本及び東アジアにおける、過去を記録するという知的行為の特質についての解明である。この特質をより良く理解するためのひとつの方法として、これと比較する対象を特定し、その要素を抽出・検討する手法がある。近現代東アジアにおける歴史認識の特質に関する研究に関しては、既に数多くの研究がある。なぜな

ら、東アジアにおいては19世紀後半以降、伝統的東アジア史学を基盤として西洋史学を受容したために、その研究は必然的に、比較研究を基盤としたものにならざるを得なかったからである。しかし、前近代に関しては、格好な比較の対象を特定出来なかったため、これまで行われてきた研究は、J. ニーダムやJ. プルセックのような少数のパイオニア的研究に限られていた。「西ヨーロッパと東アジアにおけるヒストリオグラフィーのアーキタイプ研究」と題する本プロジェクトは、アイルランドを中心としたケルト文化における歴史意識・歴史認識をその比較の対象とすることで、日

本および東アジアにおける過去を記録するという知的行為の特質を抽出することにある。

## [2] カスリーン・ヒューズ略歴

ここに紹介する資料は、Kathleen Hughes, *The Early Celtic Idea of History and the Modern Historian: An Inaugural Lecture*, (Cambridge University Press; Cambridge, 1977) の日本語訳である。本資料の掲載に関しては、『山梨国際研究』の編集部に掲載出版の可能性について問い合わせたところ、資料報告として掲載可能であるとのことであった。そこで、ケンブリッジ大学出版局の翻訳権担当部署に連絡して翻訳権を取得した上で、今回、短い解説を付して本号に掲載するものである。

カスリーン・ヒューズ (Kathleen Hughes) は 1926 年に生れ、1977 年に亡くなったイギリスの歴史家である。専門はアイルランド教会史、特にアイルランドの初期のキリスト教会史の研究で著名である。ロンドン大学を卒業後、ケンブリッジ大学のニューナム・カレッジのフェローとなり、そこで多くの業績を残した。1976 年、ケンブリッジ大学に新設された、ノラ・チャドウィック記念ケルト研究講座の初代副教授 (Reader) に就任し、同年 11 月に就任講演を行った。これが本稿のもとになった講演である。この講演から 5 ヶ月後の 1977 年 4 月に、51 才で逝去した。40 年後の今日でもその著作の幾つかは版を重ねている。経歴及び業績の詳細に関しては、Kelly Boyd (ed.), *Encyclopedia of Historians and Historical Writing*, vol.1, (Routledge; London, 1999), pp. 564-565 を参照されたい。

## [3] なぜ翻訳紹介するのか

ここでヒューズの著作を翻訳紹介する理由について述べたい。それは、冒頭で述べたように、本書がアイルランドのケルト民族を中心にした歴史意識の発達と展開に関する著作であるので、前近代における日本及び東アジアの歴史意識を考える際に、比較の対象として読むと新たな特質を抽出するのに役立つからである。特にヒストリオグラフィーが形成される過程の研究には有益である。

加えて本書は、史学理論の簡明直截な著作として読むことが出来る。20 世紀後半のケンブリッジ史学の特徴である「歴史は現在と過去の対話である」という歴史研究の態度が、実例を踏まえて説得的に書いてあるからである。この歴史研究の態度は、ヒューズの同僚でもある E.H. カーの『歴史とは何か』の翻訳を通して、日本では広く知られている。ヒューズは、数百年離れた過去を研究する際の歴史方法論に関して、実際の史料をもとに議論を展開しているため、過去との対話とは何を意味するのかが直接伝わってくる。尚、ケルト語の表記に関しては、ケンブリッジ大学の R. マッキテリック教授に実際に発音してもらい、それをカタカナで表記した。

## [4] 史料としての系図

日本との比較という視点から、ケルトの歴史観を比較史的に考察すると、興味を喚起させられる特質が幾つか思い浮かぶので、ヒューズの議論に沿って、これらを紹介したいと思う。ヒューズは、系図について多くのページを割いている。系図を史料とみなしてケルト社会を見てゆくと、多くの歴史的状況が解明できるということで、幾つかの系図の実例を示しながら、歴史学的解読の方法を提示している。系図を作成する意図は、自分自身の系統の卓越性と正統性を示すことによって、自己の権威をより増強するためである。そのため、時代を可能な限り遡ることがより権威を増すと考えられてきた。この思考法は世界中の多くの地域で見受けられるが、ケルト文化では殊更大きな力を持っていたようである。

13 世紀に活躍したスコットランドのアレキサンダー 3 世が自らの系譜を語る時、古代エジプトのファラオの娘スコタ (Scota) から始めたという一節は、秦の始皇帝にまでその出自を遡るという日本の秦氏のことを想起させてくれる。中世の日本では、数代以前の天皇にその出自を結びつける系図を所持する武将が数多く存在した。また、名家や名族の系図を購入して自らをその一族に見せかける、「系図買い」という行為が、中世から近世の日本においてはしばしば行われた。

日本における系図編纂は、『尊卑分脈』(1377 - 1395)以降何度も行われてきている。新井白石の編纂した『藩翰譜』(1702年)は、日本全土大名337家の由緒と功績と系図を調査記録したものである。また、塙保己一『群書類従』1779年の系譜部には、47の系図が収録されている。そこでは系図がひとつの部として独立して扱われており、神祇部、帝王部、補任部に次いで第4番目に置かれていることは、その重要性を物語っている。また、『続群書類従』(1792)には、313の系図が追加掲載されている。

日本においては、系図それ自体を歴史の資料とみなし、そこから種々の歴史意識や歴史観を読み解くという作業は余り関心を持たれてこなかった。しかし、青山幹哉の諸研究のように、近年、系図を歴史叙述のひとつと見なして研究することも行われている。

この系図から派生して、もうひとつ興味深いのは、紋章である。紋章はcoat of armsの日本語訳で、原義は盾のような武具に印を描いて、戦場で自分が誰であるかを味方及び相手に識別させるためのものである。この紋章を、「系図を可視化した図案」とみなすと、日本文化の中ではこれに相当するものとして家紋がある。

両者の相違点は、ヨーロッパの紋章は、結婚によって、夫婦二つの家紋をアレンジして、そのルーツが分かるようにリデザインされるのに対して、日本では結婚によっても家紋は変化せず同一のものが使い続けられることである。取扱い方法は異なっても、紋章も家紋も、時代を越えて現在でも使い続けられている「歴史のエンブレム」である。日本では礼服に家紋を入れる伝統は現在も続いており、ブリテン諸島の国々ではレターヘッドや蔵書印等に紋章が使用されている。その上、イギリスとスコットランドとアイルランドには現在でも紋章を統括する国家機関まである。

歴史を遡るという認識行為がブリテン諸島と日本列島で殊更多かったのは、大陸から離れた島であるという地理的制約が、空間軸ではなく時間軸を中心とする文化、別な表現をすれば過去に深く根ざす文化(cultures with root extending into the

distant past)を生み出したといえる。

## [5] 書かれた歴史と語られた歴史

書かれた歴史ではなく語られる歴史に関して、ヒューズは多くのページを割いている。翻訳87ページでは、アイルランド語で、歴史はシエンファス(senchas)という言葉で表現されるが、これは昔話・言い伝えを意味していることを述べ、翻訳89ページでは、バードと呼ばれる詩人が王の一族とその事績の歴史を朗唱する場面が引用されている。

書かれた歴史ではなく語られる歴史に関しては、18世紀まで使用されていた英語のhistoriology(歴史を語る)という言葉の存在がその重要性を証明してくれる。-logyはロゴス、つまり言葉で過去を語り伝える意味である。これと対をなす言葉がhistoriography(歴史叙述・歴史記述)である。-graphyはグラフ、つまり記述された符号で過去を伝える意味である。現在ではhistoriographyしか使われておらず、『ウエブスター英語辞典』第2版(1841)では、historiologyは廃語と追記されている。

文字が少数の人々のものでしかなかった時代においては、語り伝えることによって過去の事績は伝承されてきた。バードの話を読んで思い起こすのは、日本で8世紀に太安万侶が『古事記』を編纂する時、『帝紀』『旧辞』を諳んじていた稗田阿礼の誦するところを記したという『古事記』の冒頭の一節である。稗田阿礼は個人名が残る日本最古の語り部である。しかし口承を文字に書きおこすことによって、歴史の暗誦が日本から消えたわけではない。平家物語などの歴史物語を暗記して語り継ぐ琵琶法師の語りは19世紀まで行われていた。戦国時代にその起源を持つ講談は、太平記のような軍記物を語り伝える口承文化をつくり上げ、第2次大戦後はラジオの普及と共に全盛を極めたが、テレビの普及に押されて現在では下火となっている。

それ以上に、私がこのケルトの詩人の一節を読んで思い起こすのは、黒田清輝の絵画「昔語り」である。この完成画は既に消失していて現存しな

いが、下絵が東京文化研究所に保存されている。黒田がこの絵の着想をえたのは、1893年に京都に旅行した時、清閑寺で寺の僧が平家物語の一節を語る姿に接した時のようである。もし現存していたとすれば、この絵は黒田の最高傑作の一つとなっていたのではないだろうか。

歴史口承と歴史叙述の関係は、歴史叙述が歴史口承を駆逐して取って替わったと考えるのではなく、両者は共存してそれぞれの役割を果たしているという視点からみると新たな発見が生まれるように思われる。

## [6] 史料としての聖者伝

ヒューズは講演の最後のところで、アイルランドの学問伝統と大陸の学問伝統とを総合した資料として「聖者伝」を挙げている。この言及は、臨済宗の僧である虎関師錬（1278—1346）の『元亨釈書』（1322）を想起させてくれる。

これは初めての日本仏教史の著述であるが、師錬は「資治表」の中で、日本仏教史を書くのに際して、孔子が編纂した『春秋』の編年体で書くのがよいか、司馬遷の『史記』が採用している紀伝体で書くのが良いかについて考察し、歴史を著述する者から見れば編年体が優れているが、書かれた歴史を読む者から見れば紀伝体のほうが理解しやすいと結論し、紀伝体を採用して著述している。

日本仏教の伝統と中国大陸の歴史叙述の伝統とを総合させた著述としての『元亨釈書』、中でも巻1－19の伝（日本僧侶の伝記集成）を読むと、アイルランドの「聖者伝」に匹敵する人間味あふれた豊かな内容と叙述の巧みに魅了される。

ヒューズの議論は、これら以外にも多岐にわたり、法律文書を歴史資料として読むことの重要性とか、キリスト教の伝来により絶対年代を付した年代記的著述が可能になったことなど、学問的興味を引く多くの指摘がある。

## [7] 比較研究から得られること

ユーラシア大陸の東と西に、東アジアと西ヨーロッパという文化圏が存在する。ユーラシア大陸を真ん中で二つ折りにすると、両者がうまく重

なり合うのは符合としか表現しようがない。その上、それぞれの文化圏には、日本列島 Japanese archipelago とブリテン諸島 British Isles という島がそれぞれに付随しているのも対称的であるし、日本列島は37万キロ平米、ブリテン諸島は31万キロ平米とほぼ同じ面積であるのも興味を引かれる。日本列島においても、ブリテン諸島においても、紀元前から古い文化が存在し、2000年を越えて現在に続いているということも共通している。

日本列島は一つの国からなるので見落としがちだが、現在のブリテン諸島は、英国とアイルランドという二つの国からなり、ヨーロッパ大陸との間にブリテン島を挟んだアイルランドは、古い文化を残してきた島である。

このブリテン諸島に居住していたのがケルト人である。ケルト人は、古代ローマ勢力がヨーロッパに侵攻する以前に、広くヨーロッパに居住していた人々である。現在日本におけるヨーロッパ史の見方は、地中海を拠点とする古代ローマ文化とキリスト教文化が北上してヨーロッパ全域に広がり、それが近代のヨーロッパを形成して行くというストーリーが主流である。そのため、歴史教科書はあまりケルト文化にページをさかないが、ケルト文化をキリスト教文化の受け皿としてみると、その受け皿によって受容された文化は大きくその性格・内容を変化させている。

日本列島に大陸の古代文化が入ってきた時、日本という受け皿によって受容された大陸文化がどのように変容したのかは、歴史研究の主題の一つである。それから江戸時代の終わりまで千年以上をかけてつくり上げられた日本独自の文化は、今度はそれを受け皿として西洋文化を受容した。そしてこの受容が現在でも継続していることは、興味の尽きない学問的テーマである。ヒューズに代表されるイギリス人歴史家のケルト史に対する研究姿勢と研究手法は、日本人歴史家にとって参考になるところ大である。（佐藤正幸）

カスリーン・ヒューズ

## 初期ケルト民族の歴史意識と現代の歴史家

佐藤正幸 訳

このたび、ケンブリッジ大学に開設された、ノラ・チャドウィク記念ケルト研究講座<sup>1)</sup>は、その名の示す通り、彼女の遺産をもとに設けられたものです。講演にはいる前に、まず私は、チャドウィク女史に、感謝の意を表わしたいと思います。彼女は、文学とか歴史という区分を、少しも意に介することなく、学際研究に一生を捧げた歴史家でした。その学問の幅広さは希有のものであった、と申し上げても過言ではないと思います。また、彼女は、一見何の関係もないような断片的証拠を互に関連づけることに、類い稀な才能を持っており、その才能たるや、あたかも不毛の荒野を緑野に変える魔術のようなものでした。その上、これ迄どこから手をつけてよいのか分からなかった学問分野に、新たな道を切り開いたのです。彼女の若い頃の仕事は、アングロ・サクソン、北欧、ロシア研究が主でしたが、後年、私が彼女を知るようになった頃には、ケルト研究に一身を献げておりました。この研究にとりつかれ、この研究を尊敬し、また、この研究に専心していたのです。「献げる」という言葉を殊更用いましたのは、この言葉の理想的な姿を、彼女の中に見た思いがしたからにほかなりません。彼女の気品の良さの魅力とが相俟った、その献身的な姿に、誰もが心を動かされ、彼女と会った人々は、熱に浮かされた病人のように、みなケルト研究の虜になってしまったのです。

千年前に、このような機会が与えられたとしたら、私は王宮で讃辞を述べるか、修道院で説教するかして、この講座の産みの親であるチャドウィク女史を褒め称えたことと思います。しかし、そうするよりも、ノラは、むしろ講演のほうを喜んだのではないのでしょうか。それも、彼女についての講演ではなくて、彼女が一生を捧げた研究に関する講演のほうを喜んだのではないのでしょうか。

また、もし彼女が生きていたら、私がケルト研究について専門用語を使わずに講演することを、喜んで許してくれたことと思います。そのようなわけで、本日は、初期ケルト民族の歴史概念についてお話するつもりです。また、現代の歴史家はこの問題をどのようにとらえたえらよいのか、にも触れてみたいと思っております。

皆様御承知のように、歴史研究は原史料の徹底的な批判検討から出発しなければならない、というのが昨今の考え方です。史料を史料として活かすためには年代確定が必要ですし、また、その作業を通して、初めて史料の信頼度が分かるわけです。もちろん、歴史家その人の研究も重要でありまして、歴史家の問題意識とか研究方法、その歴史家の属している学派とか、その置かれている立場といったものをまず考慮に入れておくことも、歴史研究では大切です。しかし、中世も初期の頃には、史料を批判的に評価しようとした歴史家はほとんどいなかった、と申し上げても過言ではないでしょう。ベダ<sup>2)</sup>は、それを行った数少ない歴史家の一人でした。今日の歴史家が、彼を比較的高く評価しているのは、恐らくそのためだと思います。ベダは、今私たちが歴史の研究をする際に前提としていることの幾つかを、既に考えておりました。彼は事件を正確な年代順に並べていましたし、関連史料を検討することも忘れてはいませんでした。事件の当事者や目撃者から、直接話を聞いたことのある人々から、情報も得ておりました。彼の研究方法は、私たちの方法とあまりにも似ておりますために、その新鮮さは、しばしば見過ごされています。ベダは、今日これから話しますことと大変似通った歴史の伝統を、知っていたにちがひありません。ところが、ベダの抱いていた歴史概念や、私たちの歴史概念は、初期アイルランド人、ウェールズ人、スコットランド人の歴

史概念とは、実は全く異なったものです。私たちの持っているケルト地方の知識は、主として彼らが残してくれたアイルランド人は沢山の史料を残してくれています—史料に基づかねばなりませんので、私たちは、ケルト人がどのように歴史をみていたかを、まず了解しておかねばなりません。どのような点を誇張し、どのような点を看過していたかを、前もって承知しておく必要があるわけです。そのあとで、史料解釈の方法を検討するのがよいのではないかと思います。そこで、まずはじめに、簡単にケルト人の歴史研究の伝統について、お話ししたいと思います。次に、彼らがしばしば利用したヨーロッパ大陸の歴史研究の伝統についてふれ、最後に、どのようにしてこのふたつの伝統がブレンドされたか、について話したいとおもいます。本日は、アイルランドの史料を中心に話したいとおもいます。と申しますのは、何と

いってもその史料は、群をぬいて豊富だからです。ケルト民族の歴史観は、当時、つまり中世初期のヨーロッパでは、個人的な色彩のかなり濃いものであった、と言えます。ケルト民族が、歴史という言葉で、まず第一に思い浮かべるのは、祖先についての細々とした知識、その起源、その武勇談のように思います。アイルランド語で、歴史は、シエンファス (senchas) と言いますが、これは「昔話」、「言い伝え」を意味しており、この意味は、とりわけ家系、地名伝説、法文記録の中によく見受けられます。このことから、ある特定のグループに属する人々が、歴史を研究したり調査したりしていたことが、分かるわけです。この人々は、フィリジ (filid) と呼ばれ、私たちはふつう「詩人」と訳します。「詩人」は家業でして、親から子へ、子から孫へと、フィリジとしての技術が仕込まれ、受け継がれてきました。これとは別に、新たにこの技術を学びたい入々は、学校で厳しい訓練を受けたようです。このことについては後で史料を紹介いたしますが、詩人希望の男の子は、書かれた物を一切見ずに、長椅子に寝そべって、明かりのない部屋で詩を暗唱したり、詩のつくり方を学びました。詩人の中には幾つもの階級があり、最も優れた者は、司教や小君主と同等の名誉が与えら

れておりました。詩人の階級が制度的に無くなった12世紀頃になると、学者たちは、各地の語り部であるシャンフィー (seanchaidhe) が幾つくらい物語を暗唱しているかを試した上で、順位をつけたりしておりました。北国の長い夜、部屋いっぱい集まった人々を、どれくらい楽しませてくれるか、試験をしていたようです。

系図は歴史研究のひとつである、と申してもよろしいかと思います。系図に載っている当時の人々の名前をみていきますと、「十人力のカラドック」とか、「金持ちのエリデイラ」、といった名前によく出会うことがあります。どうも、名前というものは、個人と社会との密接な関連の中で、付けられていたようです。この名前からすると、きっと当時は、腕力とか財産とかいったことが、実際に人間を評価する基準であったことがわかります。

もちろん系図は、個人の身元を証明してくれま

すから、法的にも社会的にも重要な意味をもっていました。けれども、それにもまして重要なことは、系図が、その当事者の社会的身分を証明していたことです。当時は、身分がその人の威信、法的な権利義務を決定していたのです。また系図は、それが法的に何の役にも立たなくなってしまった後でも、ステイタス・シンボルとして、残っておりまして。1250年6月13日に行われた、スコットランドのアレキサンダー3世<sup>3)</sup>の戴冠式の記録が、現在残っています。当時、スコットランド低地地方で広く話されていた言葉は英語でしたけれども、宮廷では、ノルマン・フランス語が話されていました。しかし、儀式には、ゲール語が使われていたようです。この記録によりますと、アレキサンダー3世も、普通リストーン<sup>4)</sup>の石に坐って王冠を受けた、と思われま

す。スコットランドの王が即位するときは、この石に坐り、そして、スコット族の代表が、王の前に脆き、ゲール語で系図を読み上げるのが、昔からの習わしでした。

系図と言いましても、9世紀の中期に、スコット族とピクト族を統一したケネス・マカルピン<sup>5)</sup>や、あるいは、ファーガス・マケルク<sup>6)</sup>にまで遡って、暗唱されていたようです。そして最後は、ファ

ラオの娘であるスコタ (Scota) にまで遡るのです。スコタは後にエジプトを去り、その子孫が、幾多の危機を乗り越えたあと、最後にスコットランドに腰を落ち着けた、といわれています。アレキサンダー3世は自らの系譜を語る時、ファラオとその娘スコタから始めます。中世のスコットランドにおいてすら、系図はそれなりに価値のあることだったようです。

では、こういった系図は、私たち現在の歴史家にとって、どのような役に立つのでしょうか。ほとんどの系図には、既に十分な校訂が施されています。1962年には、750頁にもものぼる系図集が、アイルランド語で出版されました。しかし、残念なことには、翻訳とか、序文とかはついていません。ともかく、アイルランドの歴史家は、常に、系図を机上に置きながら、研究しています。しかし、系図は、どのような情報を私たちに与えてくれるか、また、私たちはそれをどのように読んだらよいか、と言うことをきちんと解説した論文とか著作は、実は、これまでなにひとつ書かれていません。歴史家は、系図を使って、あるグループに属する人々をいろいろに分類することができます。これに年代記を併用しますと、初期アイルランドの政治地図を描くことすらできます。もちろん小さな王国が割拠していたのですから、これが簡単な仕事でないことは、申すまでもありません。系図は、また、700年から1200年の500年間に、どのようにアイルランドの社会機構が変化していったのかをも、教えてくれます。当時、一族の者は、各地に散らばっていましたので、初期の系図は、傍系をも含んだ幅広い関係を描いています。しかし、時代が下がると、系図は、系統樹になってきました。ヨーロッパ世界でも同じですが、12世紀ケルト民族の系図は、社会的威厳を増すために、古代の(時には実在しなかった)祖先にまで、遡ろうとしています。これは好古趣味の産物である、と申してもよろしいでしょう。しかし、系図がいくら長いからといって、その長さや政治力とが一致していたわけではありませんから、日常生活での系図の政治的価値は、下がる一方でした。

系図には、時々、短い書き込みがみられます。

書き入れた当人が言うように、それは「解説」であって、なにかと役に立つ情報を含んでいます。『スコットランドの人々の歴史についての解説』という名で知られるテキストは、たいへん正確な記録でありまして、スコットランド王の長い系図から始まっています。これは、10世紀のアイルランド語で書かれています。この校訂者は、史料自体は7世紀のものだと考えているようです。それはさておき、これは、現在残っている、数少ないスコットランド史料のひとつで、ノルマン民族に征服される以前のアイルランド、スコットランド、ウェールズの住人にとって、系図とは何であったかを考える際の、有力な手掛りです。まず、スコットランドの人々の歴史についての解説、と書かれているタイトル自体が、大切な意味をもっています。このテキストには、ローン、アイレー、キネール・ガヴウラーニ(現在のキンタイアとコーアル)という、3つの政治分区に住んでいた初期スコット族のことが書いてあり、その系図に続く註そのものが、私たち歴史家の興味をこの上なく掻き立ててくれます。と申しますのは、その註から、各政治分区にあった「家」の数が分かりますし、いざ戦いという時、王が呼び集めることのできる人の数、船の数が分かるからです。この註は、期間が一定していないことにやや問題がありますが、ともかく、これを通して私たちは、おおまかにせよ、その国勢の概略を知ることができるわけですから、それによると、西部のケルト民族は、なにか特異な政体をとっていたようです。

ウェールズには、校訂の行き届いた系図集成が残っていて、これについては、既に幾つかの批判研究も出版されています。この系図集成によると、ウェールズとコーンウォールの王家筋は、自分たちをローマの政治的継承者だと考えていたことが分かります。英国での、ローマ側の最後の代表だといわれていたマキシマス<sup>7)</sup>を、何人かの王は、自分たちの祖先だと考えていました。情報の変化や、英国人の過去に対する感覚の変化に伴って変わってきた系図のなかに、私たちは、いろいろな姿を読み取ることができます。現在の歴史家は、先ず、系図作者の意図を理解する必要があります。

歴史家がこれを実践すれば、系図は、今まで以上に、わたしたちの研究に役立つのではないのでしょうか。

系図とも多少関係がありますが、起源神話は一種の歴史、それもたいへんポピュラーな歴史だと言うことができます。9世紀に、ウェールズで書かれた『ブリトン人の歴史』は、アエネアス<sup>8)</sup>から5代目にあたるブルトゥス<sup>9)</sup>に、ブリトン人の起源を求めています。起源神話の幾つかは、ある部族が、どのような経緯で現在彼らが住む地に来たか、また、その祖先は誰か、等々について語っています。時には、これらの話を裏付ける証拠が残っていることもあります。一例をあげましょう。デーシイ<sup>10)</sup>は、アイルランドからウェールズへやって来た、といわれています。6世紀から7世紀までに、アイルランドへの移住者は、まず南西ウェールズでグループを組みました。これに関しては、ふたつの言語で書かれた碑文が、いくつか残っております。ペンブローク県にある、ローマ文字で書かれたラテン語と、オガム文字<sup>11)</sup>で書かれたアイルランド語の碑文です。場所は、タウイの溪谷を遡って、ブレコンに行くところです。アングルシーとその北西の地にも、数点の碑文が残っています。傍証がなければ、起源神話というもの、過去にあった事実の研究には使用できません。もちろん、それを作り上げた人々の思想を考えるのには、このうえない手掛りになるのですけれども。ともあれ、起源を知りたいという願望は、何か魔術信仰のような気がします。人は死んでゆきますが、その子孫やその住んでいた家は、残るからでしょう。昔のアイルランドの詩人は、次のように歌っています。

オーク繁れる森辺の砦。

そはブルジブエ王の砦、そはカサル王の砦、

そはオイズ王の砦、そはエリル王の砦、

そはコニング王の砦、そはクリーネ王の砦、

そはモイル・ドゥーニ王の砦。

王は代われど砦は残る。

地下に眠るは王のみぞ。

王の一族とその事蹟をうたった詩の多くは、バード<sup>12)</sup>と呼ばれる詩人によって作られました。王は、専属のバードを、宮廷に抱えておったようです。バードは、戦いに勝った時には王を褒め称える歌を、王が死んだ時には悲歌を作るのを、仕事としていました。また、詩は、若い貴族の子弟の教育にも使われていたようです。ですから、詩の中で使われる言葉は、それに相応しいものでなければなりません。私がここで引用する詩は、ある修道院の写本に載っているものですが、当時の宮廷の雰囲気を見事に描いていると思います。それは、次のような句からはじまります。

才智溢るる英偉の王オイズよ、  
爽邁にして慈悲深き王オイズよ。

そして、次のように締め括ります。

王よ、この世の仁徳は全て王のもの、聖なるものも俗なるものも。

瑕疵ひとつなき門族の遠胤にして、マルグの雅醇なる王室の後胤よ。

大樹の幹にして、威厳いや増す王よ、戦いに秀でた一族の末裔たる王よ。

王の王にして卓絶この上なき王よ、高直なる銀苗の如き王よ。

社祠の祭で詩にうたわれ、高貴な（系図の）梯子は登られる。

朗々たるバードの声は酒海を渡り、オイズの御名は響きわたる。<sup>13)</sup>

ここには系図が出てきますし、飲酒もできます。何か異教的とでも申しあげたら良いような宮廷の雰囲気が、伺われるではありませんか。

「歴史小説」として知られる物語の大部分は、どのようにして王がその冠を手に入れたか、どのようにして死んだか、また王の活躍した戦闘がどのようなものであったかについて、書かれています。こういった物語を語り伝えてきた者は、現代の歴史家と同じ興味や関心をもっていただけではありません。年代については全く無頓着であった

といえます。12世紀に書かれたものに、ガルトナーンの息子カノの物語がありますが、この原型となった物語は、9世紀までに記録されていたし、事件自体はそれより150年程前に起こったものでした。150年前のことならそれ程古くはないから、正確に書けるのではないかと思われるかも知れませんが、同じ頃に書かれた年代記と比べますと、この物語の年代確定はどうしようもない程粗末なものです。語り部が言おうとしている事は、その英雄が高貴な性格を持っているということだけで、あとは全く夢のような話で飾られています。例えば、アレンの戦いの話の中で、語り部は年代記から戦死者のリストを書き抜いて載せています。しかし、語り部がこの物語で一番力を注いでいるのは、戦いの終わった夜、ひとつの生首が歌をうたう場面でした。それは次のような話です。戦いの前、北方の王専属のバードは主人の為に歌うことを拒みましたが、明晩は必ず歌うと約束しました。ところが、翌日、王とバードのふたりとも戦闘で殺されてしまったのです。戦いに勝った南方の軍隊はその酒宴で、戦場からひとつの生首を持ち帰りました。それは、死んだ王の前で歌っていたバードの生首でした。彼らはその生首を壁にかけました。すると、その生首は、ホールの光が当たらない様に顔を壁の方に向け、歌をうたい始めたのです。その場に居合わせた者で、涙を流さぬ者は誰一人いませんでした。

17世紀の歴史家ジョフリー・キーティング<sup>14)</sup>は、こういった武勇談を、それがあたかも事実であるかのように取り扱いました。現在でも、こういった武勇談を、十分な考証もせずに相変わらず引用している著名な歴史家があります。このような武勇談は、現在の歴史家にとっても十分価値あるものですが、残念なことに、多くの歴史家は、これらの大部分は後世に書かれた娯楽文学か創作だと、考えているようです。もし、こういった武勇談が、出来事をうまく説明しようとしているのなら、一体何故そうしようとしたのかを、私たちは考えてみなければなりません。その理由のいくつかは、すぐ思い浮かびます。例えば、アルスターのコンフォヴォル<sup>15)</sup>の死の物語は、明らかに一

人の異教徒の英雄を、キリスト教化することを目指したものです。その物語の中で、コンフォヴォルは、彼専属のドルイドがキリストの十字架にかけられたところまで話した時、死ぬのです。まず、コンフォヴォルは逆上して部屋を飛び出し、森にある木々を、それがあたかもキリストを殺した者であるかのように、切り刻むのです。すると、頭の高傷が裂けて、彼は倒れます。「かくして、彼は、キリスト教徒として死んだのである」と、語り部は結んでいます。つまり、彼の流した血は、頭上に注がれた洗礼の水だったわけです。しかし、この物語をコンフォヴォルの治世の年代決定に使えないことは、他の物語と同様に明らかです。アイルランドの南半分と北半分に於ける8世紀、9世紀、10世紀の王たちの物語は、その大部分がずっと後になって書かれたものであり、恐らく11 - 12世紀に、南北双方の王の強大化する力を援護射撃するためであったろう、というのがオー・クィーヴ教授の見解です。『アイルランド対外戦争』<sup>16)</sup>(つまり、ヴァイキングとの戦いですが)は、11世紀の初め迄にヴァイキングを打ち負かし、全アイルランドの最高君主となったブリアン・ボールマの家系を顕彰したものです。このパンフレットはブリアンの死後間もなく書かれたものであると、これ迄考えられてきました。しかし現在では、ブリアンの子孫の力が弱くなりだした12世紀の初めに書かれたものだ、と考えられています。このほかに、10世紀にマンスターにいた王のことを泰材にした、『カシエルのケラファーンの戦闘歴』<sup>17)</sup>と題する武勇談があります。その子孫は10世紀の後半に没落してしまいましたが、彼の子孫の一人であるコマルク・マク・カールシーフィは、12世紀に、南アイルランドで強力な指導力を持った王となりました。この小冊子は、コマルクの地位が安定し、その地位をより一層強固にするために宣伝が必要となった1127年から1134年にかけて書かれたものと思われます。この小冊子の研究家であるオー・コロニー博士<sup>18)</sup>は、コマルクの宮廷専属の世俗バードがこれを書いた、と考えておられます。これは伝統的なスタイルで書かれ、従って、年代には何の注意も払っ

ておりませんが、劇的な事件を巧みに配しております。例えば、こんな話が載っています。ダブリンにいたヴァイキングの王子が、ケラファーンを攻撃する計画を練っていました。しかし、彼には妻がいて、その妻がウォーターファードでケラファーンを一目見て恋に落ちてしまい、その計画を打ち明けてしまいました。この武勇談には、その経過が実に生き生きと書かれているのです。

アイルランドにこういった史料が沢山残っているのは、12世紀ルネッサンスのおかげではないかと思えます。イングランドと大陸では、12世紀ルネッサンスは、昔からの修道院学校よりも教会付属の学校で花開いた様です。教会付属の学校は、当時新しく誕生した町に作られ、古い伝統に囚われていなかった教師や生徒を多数引きつけておりました。しかし、アイルランドには町というものはありませんでした。ですから、アイルランドにあった学校といえば、昔から、修道院学校か詩人の為の世俗学校だけでした。12世紀ルネッサンスはアイルランドにも波及しましたが、スコラ哲学が行われた形跡がほとんど残っていないことから察せられるように、大陸でのルネッサンスとは随分異なった形態をとっていた様です。新しい知的エネルギーが海を渡ってやっ来ては来ましたが、それは、修道院と世俗学校という既存のパイプを通らざるをえなかったのです。アイルランドでは、同じ家系から聖職者と詩人が輩出しています。そして、主教管区制と司教制を導入した教会改革が12世紀にアイルランドにやっ来て来た時、改革派教会の中心として引き継がれなかった修道院学校は、時には世俗学校と混同され、また、皆世俗学者になってしまったが為に、修道院長（アリフィニフィ airchinnigh）を新たに置いたりしました。ノルマン侵入以前にスコラ scol（ラテン語のスコラ schola）と呼ばれたのは、修道院学校でありましたが、12世紀以降、この言葉は、詩人の学校を指すのに使われるようになってしまったのです。昔からの修道院学校の幾つかは詩人の手に移され、世俗文化の中心に変わって行ったわけです。

サガと呼ばれる武勇談を読んでおりますと、ア

イルランド人が自分たちの歴史をどのようにみていたかが、手に取るようによく分かります。アルスター伝説が、古代の作品であることにはそれ程驚きませんが、それが、キリスト教史観に添うように大幅に書き直されてこなかった、という事実には注目してよろしいかと思えます。「クーリーの牛盗り」という物語は予言から始まりますが、モリーファンヤルフといった神々を、キリスト教図式の一部として説明しようとはしていません。英雄クー・フリニは、天と川とに対して祈りを捧げます。「我が民の誓う神にかけて、私は誓う」というのが、彼の普段使う誓いの言葉でした。もちろん、彼がキリスト教の神に祈りを捧げたことは無かったようです。たしかに、ただ一ヶ所だけキリスト教のことを述べているところがあります。ところが、それは、後のラテン語の決まり文句から取られた学問的な文句であり、キリスト教倫理とは何の関係もないものでした。これは、クー・フリニのマントについて語っている一節にあります。このマントは、元来、サイモン・マグスがローマのダリウス王の為に作ったものです。ダリウス王が、そのマントをアルスターのコンフォヴォル王に贈り、コンフォヴォル王は、それをクー・フリニに贈ったのです。聖職者が、この物語をアイルランドの前・キリスト教史だとみていたのは、疑いようのない事実だと思います。少なくとも7世紀、あるいは6世紀からかとも思いますが、学問のある聖職者と俗人の関係は密接でありました。アゼンナーン<sup>19)</sup>によりますと、訪れてくる詩人に、「自ら作詩した歌を、旋律をつけて歌う」よう頼むのは、コロンバ時代のアイオウナではよくあった事だそうです。当時どの様な歌を詩人たちが歌っていたかを、皆さんはお知りになりたいでしょう。コロンバの頃の有名な王たちを讃えた詩は、手振り身振りを混えて歌われたのではないかと、私はいつも想像しております。

当時の勇者のもっていた道徳観は英雄的なものでしたが、聖職者は、そういった武勇談を書き留めるのに、何のためらいもなかったようです。武勇は最も讃えられた行為で、実戦とか競技で競われました。武勇は、本来、競争的なものでありま

すから、英雄はいつも戦う用意をしていなければなりません。まず口論から、この競技は始まるようです。相手を罵り、脅し、侮辱します。英雄は、面目を潰されることは許されません。アイルランドでは、「顔」と「名誉」に相当する言葉は、エネフ (enech) という同じ言葉で表わされます。また、この言葉は、「保護」とか「礼節」という副次的な意味をも持っています。つまり、男の名誉は面目を保ったり、礼節を重んずることが出来るかどうかだったのです。倫理面からいえば、現代の歴史家は、こういった物語の内容を事実とは考えていないようですが、武勇談は、法律文書や年代記の求めているものと一致するように思えます。これとは別に、あと2種類の史料について、もう少し考えてみたいとおもいます。

アイルランドの知識人は、シェンファス (senchas) という語を系図、起源伝説、武勇談ばかりでなく、法律文書にも使っています。重要な法律文書のひとつは、シェンファス・モール (Senchas Már) 『偉大なる伝統』という名称で呼ばれています。パトリックも、ドゥヴサフも、そのように呼んでいたようです。法律文書は、知識人とか裁判官と呼ばれる一部の人々によって、保存されてきました。たまに、ラテン語からの借入語がみとめられる事もありますが、大変古い、古代アイルランド語で書かれている文書も、幾つか残っています。それは、キリスト教が伝来した頃のもののように私には思えます。その文書は、ただ機械的に筆写され続けてまいりましたが、8世紀以後は止んでしまいました。これ以降、制度の上で相当の変化が起こったようです。法律文書に載っている王位に関する諸規則や、年代記に載せられている事件の中に、私たちは、西暦800年の変化の様子をみてとることが出来ます。後に出来た注釈によりますと、その古い法規は、既に当時の状況に合わなくなってしまっており、また、施行されていなかった事も分かります。

アイルランドの法律文書は、今でも沢山残っています。5巻本の大きなものが、19世紀に印刷されましたが、これは全体の半分ちょっとの分量でしかありません。その法規集成は、社会の様々な

側面を描いています。どのような法律を含んでいるかと申しますと、身分、保証、証拠、差し押さえに関する法律、王位法、病人扶助法、土地法と農耕規則などです。土地法と農耕規則については、これまでほとんど研究されてきませんでした。皆さまも御存知のことと思いますが、自由保有権を持った一家族所属の小さな農場の写真がよく教科書などに掲載されています。この写真は、今日の西アイルランドのどこにでもみられる農場によく似たものですが、土地法とか農耕規則の研究結果から、これが誤りであることが実は分かったのです。当時ヨーロッパの至るところでみうけられた不自由小作人や農奴のいる大規模農場が、アイルランドにも幾つか存在していたのです。

今まで述べてきましたように、起源伝説や武勇談は、確かに文字通り信ずることの出来ないものです。では、法制度の歴史 (senchas) は、起源伝説や武勇談より信頼出来るものでしょうか。私には、このふたつの間には、何か基本的な性格の違いとでも言ったものがあるように思えます。一例をあげますと、ケルト民族の法律は大変早い時期に出来たものである、ということです。武勇談の多くは、10 - 12世紀に書かれたものですが、法律文書は、7 - 8世紀に書かれています。しかも、法律文書というものは、それが実情に合わなくなると同時に編纂されなくなり、代わって、その後は、注釈が行われるようになってきます。これとは全く別の伝統を引き継ぐものとして、また、実用に供されたものとして、6 - 7世紀の教会法があります。実はこの教会法のおかげで、世俗法に書かれた諸制度の多くが実際に機能していた、ということが分かるのです。このようなわけで、法律文書は、一応文字通り受け取ってもよいのではないかと、私は考えます。しかしながら法律文書は、大変複雑で細かい事柄を扱っており、それは現実の社会よりも、むしろ理想の社会を描いているように思えます。つまり、この法律はこういうものだ、と規定するのは法律家であり、その法律を施行するのは、法律家の雇用主か、あるいは法律家の一族の者であった、ということです。この

関係は、常に頭の中に入れておかねばなりません。

いろいろな未開社会と同様に、古代アイルランドにおいても治安を維持するためには、世論に基づかねばなりません。アイルランドの法律からひとつ例を出しましょう。それは、テシュチイ (teist) と呼ばれる社会的地位に関する世論です。1930年代に至る迄続いたこの恐ろしい慣習を知るためには、クレア地域の孤立した村落社会を研究した、アメリカの社会学者アレンスバーグの研究<sup>20)</sup>を読むだけで十分だと思います。これとは別に、今日でも、ある意味で機能している古代アイルランドの法律があります。これは、ある人が現在他人の手に帰している物品に対して、自分は正当な所有権を有すると考えた場合、それを入手する為に、その所有者に対して断食をして、その所有権の移転を請求する場合の、合法的な手段に関するものです。もし断食した者が死ねば、その相手は、その死に責任があると考えられ、死んだ人の親族は、復讐することが許されるのです。アイルランドでのハンガーストライキは、まさに、古代の慣習に起源を持っているといえます。

ウェールズの法律は、アイルランドの法律よりずっと後で作られたものです。その法律文書の原型は、たぶん12世紀に始まると思いますが、内容はいろいろな時代に互っています。ですから、そのひとつひとつについて、それがいつ作られたかが決定されれば、ウェールズの諸制度の歴史を研究している者には、大変役立つのではないのでしょうか。恐らく7世紀のものだと思いますが、王の理想的な行動について、モラン判事の記したアイルランドの文書が残っております。それには、君主の「正義」「正当」「真理」について、また、君主が国民の為に為すべき事が書かれています。それによると、君主は、平和と富をもたらす、軍隊を指揮する能力を有するばかりでなく、次のような事もしなければならぬと言っています。

ペストと大稲妻が国民に襲いかかるのを防げるか否かは、君主の正義による。

巨木で作られた大マストを沢山持てるか否かは、君主の正義による。

ミルク生産が増えるか否かは、君主の正義による。

大きくて良質のモロコシが沢山とれるか否かは、君主の正義による。

沢山の魚が川を泳ぐか否かは、君主の正義による。

平凡な一家が子孫を増やすことが出来るか否かは、君主の正義による。

法律文書には、ラテン語からの借入語は、ほとんど認められません。また、そこに盛られている思想は、オデッセイとか、それと同時代の作品にみられるような、前・キリスト教的なものです。しかし、面白いことに、これらの条文を採用しているのは、17世紀の教会法の専門家なのです。教会法の専門家によると、公正な君主は、神から平和と幸福を受けるばかりでなく、温和な風、静かな海、豊饒の地、大きな樹木、沢山の息子、また、将来の幸福をも受け取るのだそうです。これらの事を記載したラテン語の文書は、カロリング朝のフランク王国に伝わり、オルレアン、ジョナス、ランズのヒンクマルも使ったようです。アイルランド法は、中世の王権思想に寄与したと言う事が出来ましょう。つまり、天災がうち続くことと異変が起こる事を、年代記は教えてくれているのですから、皮肉なことに、真の君主は、異教イデオロギーとキリスト教イデオロギーの双方に寄与することが出来たわけです。

アイルランドの史料として、年代記は、連続して残っている為に、とても重要であります。しかしそれは、ラテン世界や大陸とは全く異なった伝統の中で、書き継がれてまいりました。最初、年代記は、ラテン語で書かれていて、マルケリヌスのような大陸の年代記作者を引用していました。いくつかの修道院は、7世紀の後半、あるいは、それ以前から、年毎に記録を残してきたようです。年代記の記録というものは、世間話のように、その時々都合に併せて作り変えられたりしたものではなく、事実を簡明直載に羅列したものです。修道院の中で、最も重要な人物である修道院長の死、司教とか写字生の死、また王の死、戦

闘、ペスト、畜牛の疫病、穀物の不作等々の身近な出来事を記したものです。英国の年代記は、イングランドの年代記に代表されるように、世俗の出来事に重点を於いていますが、アイルランドの年代記の多くは、教会の出来事の方に重点をおいています。時代が下がるに従って、アイルランドの年代記の扱う範囲は拡大され、9世紀の初め頃には、使用言語がラテン語とアイルランド語半々となり、最後には、アイルランド語だけになりました。アイルランド語で書かれた膨大な年代記が、現在でも残っておりますが、残念ながら、写本自体はそう古いものではありません。つまり、内容自体は、それが起こった時に書かれたと思いますが、後で挿入された事柄があるかも知れないのです。

例えば、アイルランドには、膨大な数の怪奇物語（ミラビリア *mirabilia*）が残っており、その幾つかは、年代記の中にもみうけられます。こういった物語の載っている8世紀の記録をみますと、その部分だけ、アイルランド語で書かれていることが、よくあります。（その他はラテン語で書かれています。）ですから、それがどんなに微に入り細を穿っていても、あとで挿入されたものであることは、明らかです。少し実例をあげてみましょう。アルスターの王であるオイズ・ローニの息子フィアフナの時代に、一頭の鯨がバリフェの浜へ打ち上げられました。その鯨は3本の金歯を入れており、一本が50オンスありました。この3本のうちの1本が、バンガに運ばれ、そこの教会の祭壇に供えられました。「この年、752年」。この挿話は、いったい何を言いたいのでしょう。この年代は、明らかに、後で書き加えられたものだと私は思います。ジラルダス・カンブレシス<sup>21)</sup>は、これとは違う話を載せています。クロンマクノイズで船が乗組員と一緒に空中に浮かんでいました。これと同じ出来事については、タリチュの市で空に浮かんだ船を見たという長い話が別の所に載っています。それは、10世紀に、ノウスのコングアラッフ王が空に船を見た、という話です。「船員の一人が鮭めがけて銚を投げました。その銚は的が外れて、市に集まっていた入々の中に落

ちてしまいました。その後で、ひとりの男が船から水中に飛び込みました。」彼は、上からその銚の柄を掴みました。市にいた一人の男が、その銚の先を掴みました。「柄」を掴んだ男が叫びました。「離してくれ、溺れてしまう。」コングアラッフ王は市の男に命令しました。「離してやりなさい。」すると、その男は、船に向かって泳いで戻ってゆきました。この物語は、他の物語と同様、アイルランドの怪奇物語の中に入っています。アイルランド人は、不思議な出来事を、心底好きだったのでしょ。珍しい物語も沢山ありますが、中にはリヴィウスのような、古典時代の歴史家から借りてきたものもあります。それらが、比較的後の時代に校訂された年代記の中に挿入されていることには、疑いの余地がありません。

年代記にはこういった種類の物語がいっぱいはいっている、という印象を与えてしまったとしたら、お詫びしなければなりません。実は、全く反対なのです。年代記には、多くの簡潔な項目や、地名、人名ばかりが載っておりまして、これには私達も頭を悩ませているのです。怪奇物語とは全く対照的だと申せます。また、地名、人名といったものは、系図や、王のリスト、人名表と一致しなければならぬのです。この問題が解決すれば、年代記は、歴史家にとって、最も価値のある史料となるのです。年代記は、民間史料には欠けている年代学をもっており、修道院長職とか、王位の系図、また歴史研究の際に重要となる戦闘や、主な政治事件の記録などを載せています。同一の家系の中で、代々受け継がれてきた修道院長職や、教会内部での、その他の重要な地位を研究していると、制度というものが常に変更されていることに気がつき、修道院での、代々続いている派閥争いの経過を辿ってゆくこともできます。また、いつ、どのようにして、政治と法理論とが分離し始めたかを、年代記は教えてくれます。年代記を読みますと、私達は、ヴァイキングの圧迫がどの程度のものであったか、また、どのような周期をもっていたかを知ることも出来ます。記録から一時的に消えてしまった修道院があったり、皆から非難を浴びている修道院があったり、

時には、すぐ側にヴァイキングの居住区があるのに、明らかに侵略されていない修道院があったりしたことを、年代記は教えてくれます。恐らくこのような場合、ヴァイキングも、食糧だけは供給してやっていたのでしょう。昨今、テロリストが身代金を強要するのと、よく似ているとは思いませんか。ともあれ、年代記は、現代の歴史家にとって、あらゆる史料の中で、最も頼りになるもののように、私には思えます。校訂の仕事が、まだ沢山残っていますが、正しい問題意識をもって年代記を研究すれば、それは、様々な問いかけに答えてくれるでしょう。年代記は、アイルランド史研究のバックボーンだ、といっても過言ではありません。

キリスト教と共に伝来した大陸の学問伝統と、シェンファス (senchas) というケルト固有の伝統とが、どのようにして統一されていったかは重要な問題だと思います。アイルランド学派に属する、7世紀の教会法学者は、土地の法律家と頻りに往来しており、昔からの法概念をラテン語で書き直したり、アイルランド語をラテン語化したり、聖書を旧来の法律文害に使われている言葉で説明したりしていました。アイルランド法では、女性目撃者の証言、つまり、フィアズニシェ (fiadnaise) は、証言として認められていなかったようです。例えば、イースターの朝、墓が空っぽになっている、というニュースを持ってきた女性から、その証拠物の受け取りを拒否したキリスト教伝導者のことを、ある教会法学者は記しています。アイルランドの法律家にとっては、これは、当たり前のことであったのです。また、神に選ばれた人々は、いろいろな組織に属している、ということで、世俗法律家は、アイルランド社会の一夫多妻制を、正当化しておりました。その注釈には、ソロモン、ダヴィデとヤコブ、ソロモンと50人の妻、等のことが記されています。ブラスマググ牧師は、キリストの生涯について、法律用語をいっぱい使った詩を、若い頃作っています。例えば、神の恩寵とはラス (rath) である、つまり、それは、君主が家来に与えた封土であって、家来の忠誠心を繋ぎ

止めておくものである、といった具合です。牧師と詩人、牧師と教会法学者は、同じ家柄の出であり、同じ文化的遺産を享受していました。

アイルランド古来の伝統と、大陸の伝統とは、アイルランドの偽史として知られている本<sup>22)</sup>の中で、融合いたしました。この偽史を書いた歴史家たちを、現代の学者は、「総合史家」と呼んでいます。アイルランド人の牧師は、大陸的教養を身につけていましたので、ローマ、ギリシャ、ユダヤの歴史上の主な出来事を、良く知っておりました。牧師たちはアイルランドの物語を、大陸の歴史の一環としなければならないと考え、次のような言い換えを行っています。アイルランドの最初の侵入者パルソロンは、大洪水のあと、1002年後に家来を従えてやって来た。後世の侵入者スペインのミールは、紅海横断後、440年にやって来た。アルスターの首府であったエミン・マファは、アレキサンダー大王の治世32年に築かれた。キリストは、アルスターの王コンフォヴォールの治世28年に生まれた。コンフォヴォールは、ティベリウス王の治世10年に死んだ。こういった言い換えは、まだまだ沢山ありますが、年代記の古い出来事を扱った部分に、よく見受けられます。また、欄外に、並んで書かれていることもあります。ウェールズ語の『ブリトン人の歴史』<sup>23)</sup>の著者も、この技術を知っていたようです。ブリトン人がブリテン島を支配していたとき、イーライ司祭はイスラエルで裁き人であった、とその著者は書き記しております。ある詩人は、教会で学んだことを活かして、「総合する、つまり物語を年代記の方法を使って時代順に並べ替え」ておりました。アイルランドの有名な神話のひとつに、タラの大君主の神話、と呼ばれるものがありますが、これは、後世の最高君主権を、過去にまで遡って拡大解釈し、理想化したもので、アイルランドの王の系図作者が創作したものです。この傾向は、叙情詩の中にもみられるものでして、そこでは、神を、「天の大君主」とよんでいます。

先史時代のアイルランド侵略を扱った本は、『アイルランド略奪の書』、という題で知られていま

すが、アイルランド成立に関しては、この本が最後の拠り所になって来ているようです。この伝説の骨子は、『ブリトン人の歴史』にも載っています。これは、ウェールズ人の著者が、「スコット族の生き字引」から聞いた話のひとつを、載せたのにちがいません。『略奪の書』を書いたアイルランド人が誰であるかは分かりませんが、旧約聖書を手本にして書いたことは、明らかです。しかし、この頃になりますと、初期の侵略者たちは、エウヘメリズム<sup>24)</sup>に従って、アイルランドの異教の神々になっておったようです。「女神ダヌの人々」は、アイルランドの現在の住人であるゴイジリ人によって、追い出されました。伝説によりますと、追放されたひとびとは地下に潜り、アイルランドの先史時代に行われていた、土木工事に携わっていたようで、彼等は、今日も、そこにいるのだそうです。

こういった初期の歴史家の著作を読みましても、先史時代のアイルランドとブリテンについては、何の得るところもありません。けれども、ケルト人、特にアイルランド人、それと学問については、いろいろと教えられることがありますし、歴史家はどのような学問領域に通暁していなければならぬかを知ることができます。また、郷土史家がアイルランドの伝説を、一貫した年代記的羅列に変えてしまった結果、その研究対象であるふたつの学問伝統を、どのように混同してしまったかをも、教えてくれます。

アイルランドの学問伝統と、大陸の学問伝統とを総合した別の資料として、聖者伝があります。これは、大陸の聖者伝に倣ったもので、あらゆる聖者伝の特徴を兼ね備えており、聖者である資格を述べたり、また、聖者をすばらしい奇跡を行う人として、一貫して扱っています。しかし、イングランドや大陸の聖者伝よりも、アイルランドの聖者伝の方が、生き生きと書かれています。ムリフーのバトリックの、7世紀の生活を描いた部分は、聖者伝というよりも、むしろ武勇談と言った方が、ふさわしいようです。これは、イライジャと、予言者ベイアルの競争の手本にされました。バトリックは、ロイフィレ王専属のドルイド教団員と

次々と戦い、その都度、勝利を得ました。モフダが、南北の境界線上にあった修道院ラハンから追放された事件を扱った後世の物語では、北方の大修道院長は、ラハンの勝者と論争をしております。双方共その実力を吹聴し、お礼参りをするぞと脅したり、それはそれは世俗の英雄たちの争いよりも、激しいものであったようです。ブリガウンのフィンフーは、「火花を散らす」ように怒る男で、その一生は、戦闘に明け暮れていたようです。この男は、また、戦闘に生き甲斐を感じていたようで、(例えば、彼が歯を噛み合わせると、火花が散った)とされています。「獵犬」といわれたクーフリニのようだったそうです。この聖者は、晩年、「懺悔所」で死にました。しかし、このような内容に読者が興味を示すかどうか、私には疑問です。ウェールズの聖者伝には、アーサーがカイとベドウィルと一緒にあらわれます。しかし、この3人は英雄とはほど遠いものでした。このウェールズの聖者伝によりますと、アーサーはいつも聖者に負かされていた、と書いてあります。アーサーは、まだこの頃は、ロマンチックなキリスト教の王子になってはいませんでした。さて、聖者伝というものは、普通、系図の説明から始まります。つまり、まず最初に、聖人の社会的地位が、貴族と並ぶものである、としなければなりません。次に、彼が修道院を建立したことを、書きます。その修道院は、彼の死に場所であり、そこに、彼の遺骨が置かれ、「彼の復活の場」となるのです。聖人は、既に奇跡を行ったのですから、その力はもう説明済みである、といえます。ですから、地方の王は、しばしば聖人に手助けを求めていたようです。また、ビリフィジ<sup>25)</sup>が、豊饒の女神の役割を演じた事からも分かりますように、時には、異教の神々の役割を演じた聖人もおりました。また、予言と透視力の奇跡について書かれている2冊の本の中で、コロンバが行っているように、聖人は、以前にドルイド教団員が行っていたことを、引き受けていたようです。聖者伝は、初めから終わりまで、該当する聖人の日の説教のために、書かれたものです。聖者伝は、その後、一般民衆に説教する為に、土地の言葉で書かれるようになり、初期の聖者伝

よりも、かなり世俗的要素をふくむようになってきました。つまり、後世の聖者伝は、聖者の遺骨の力を強調したりしていますが、それは、寄付を沢山貰う為に、民衆向けに書かれたといえそうです。初期の大陸の聖者伝と、土着の武勇談、という二重の伝統は、こういった聖者伝では実に顕著だ、といえます。聖者伝を通して、現代史家は、聖人の影響範囲と、彼の宗派の政治力を知ることが出来るのです。

アイルランドは、初期のスコットランド以上に、大陸の学問伝統の影響を受けておりました。このことは、アイルランドほどではないにしても、ウェールズについても、当てはまります。アイオウナには、初期の年代記が沢山残っていましたが、現在、私たちは、アイルランド人の校訂したものしか、読むことはできません。また、コロンバの前半生を綴った伝記もありました。しかし、これとは別に、スコットランドの史料は、伝統的方法で書かれています。それは、主として、系図と王の即位表です。また、これとは別に、初期のスコットランド史に関しては、アイルランド側とイングランド側の史料があります。8世紀の後半以降、ウェールズでは、大陸で行われていた方法で、年代記が書かれています。8世紀に編纂されたもので、北部英国年代記というものがありますが、残念ながら、この年代記は、アイルランドの年代記ほど、中身が濃くありません。アイルランド人は、7-8世紀にかけて、大陸と密接な関係を保っていましたが、この関係が、アイルランドの歴史学の伝統に良い影響を与えたのではないかと、思います。

初期ケルト民族の歴史家たちの住んでいた世界と、ノラ・チャドウィックの住んでいた世界は、時代の相違以上に、隔たったものです。10数世紀という長い間に、西洋人の過去を見る目は、根本的に変わってしまいました。その結果、私たちの知っている過去の姿や中身は、初期ケルト民族の実際の世界とは、随分違うものになってしまったと思います。私たちの考える史料分析は、私たちが、想像をまじえて評価するにせよ、実体とは随

分異なったものではないか、と思います。しかし、ケルトの歴史家たちは、何を言おうとしていたのだろうか、という愛情を込めた問いかけから、歴史研究は始まるのではないのでしょうか。

(この就任講演は1976年11月5日にケンブリッジ大学で行われた。)

## 注

- 1) ノラ・チャドウィック Nora Kershaw Chadwick (1891-1972) は、イギリスの中世学者。夫のヘクトール・チャドウィック Hector Munro Chadwick(1870-1947) と共に、ケルト研究とアングロ・サクソン研究で一時代を画す多大の功績をあげた。ノラ・チャドウィックの人と業績に関しては、Sandra Ballif Straubhaar, "An Extraordinary Sense of Powerful Restlessness" Nora Kershaw Chadwick 1891-1972" (<http://www.academia.edu/3863414>) を参照のこと。
- 2) ベダ Venerable Bede (672/673-735) は、イギリスの聖職者。著書 *Historia ecclesiastica gentis Anglorum* によって「イギリス史の父」と呼ばれる。日本語訳は、長友栄三郎 『イギリス教会史』(創文社、1965年)。
- 3) Alexander III (1241-1268) は、1249年から1286年までスコットランド国王として在位し、ノルマンの侵入を防いだり、近隣諸島を併合したりして、その治世はスコットランドの黄金時代と呼ばれている。
- 4) The Stone of Scone のスクーンとは、スコットランドのテイ河畔の村の名で、昔ここに宮殿があった場所である。スコットランド国王は代々この宮殿の石に座って冠を受け即位式を行った。1296年にこの石はイングランドに持ち去られ、ウエストミンスター寺院におかれ、英国王の戴冠式に用いられてきた。1996年、このスクーンの石は700年ぶりにスコットランドに返還され、現在はエジンバラ城に置かれている。
- 5) Kenneth MacAlpin(810-858) は、最初のスコットランド王と考えられている。
- 6) Fergus MacErc (Fergus Mór mac Eirc) は、6世紀頃に存在したスコットランドの伝説上の初代国王とされ、スクーンの石をアイルランドからスコットランドに運んできた人物とされてきた。代々のスコットランド王は、この人物の末裔だとされている。
- 7) Magnus Maximus (335?-388) は、383年にローマ皇帝となり、388年に殺されるまでブリテン・ゴール・スペインを支配した。
- 8) Aineas は、ギリシャ・ローマ神話に登場する勇者で、トロヤ戦争の英雄。
- 9) Brutus は、トロイのブルータスと呼ばれ、伝説上の初代のブリテン王とされている。

- 10) Déisi は、中世初期にアイルランドにおいて政治力を獲得したグループに属する人々の呼称である。
- 11) Ogham は、中世初期にアイルランドで用いられた文字で、直線数本を上下左右斜めに組み合わせて表記する文字である。
- 12) Bard は詩人と訳されるが、単に詩だけでなく、物語を作る人をも含む幅広い表現である。シェイクスピアもバードの一人である。
- 13) 出典は、*Thesaurus Palaeohibernicus*, II, (Cambridge, 1903) の 295 頁にある W. Stokes and J. Strachan の英訳。本書は以下のサイトで無料閲覧が出来る。  
(<https://archive.org/details/thesauruspalaeoh02stokuoft>)
- 14) Geoffrey Keating (1569? – 1644?) は、アイルランド語で Seathrún Céitinn と呼ばれる司祭兼歴史家である。主著は *Foras Feasa ar Éirinn* (アイルランドに関する知識の基礎) で、これは *History of Ireland* という題で英語に訳されている。
- 15) Conchobar of Unster は、Conchobar mac Nessa と呼ばれる、アイルランドの伝説上の王である。
- 16) 本書の原題は、*Cogad Gáedel re Gallaib* (英語名 *The War of Irish with Foreigners*) である。
- 17) 本書のアイルランド語書名は *Caithreim Cellachain Caisil* であり、*The Battle-Career of Cellachan of Cashel* と英訳されている。
- 18) Donnchadh Ó Corráin は、ユニバーシティ・カレッジ・コーク (University College Cork) の名誉教授である。
- 19) Adomnan (624? – 704) は、スコットランド・アイオーナの聖職者で、Saint Adomnán of Iona と一般に呼ばれている。
- 20) Conrad M. Arensberg, *Family and community in Ireland*. (Harvard University Press, 1940).
- 21) Giraldus Cambrensis(1146?-1223?) は Gerald of Wales と呼ばれる司祭で年代記作者。彼の著作は、以下の URL で無料公開されている。( <https://archive.org/details/historicalworksc00gira> )
- 22) ここでいう Irish pseudo-history は、*Lebor Gabála Éirenn* (アイルランド略奪の書: The Book of the Taking of Ireland) のことをさす。本書の原文とその英訳は以下の URL を参照のこと。  
(<http://www.maryjones.us/ctexts/leborgabala.html>)
- 23) *Historia Brittonum* は数種類の URL で無料公開されている。中でも Theodore Mommsen の 1898 年出版の校訂本は一読の価値がある。  
(<http://www.historiabrittonum.net/>)
- 24) Euhemerism とは、神の起源は歴史的偉業を成し遂げたものがその死後祭り上げられたものであるとする説で、この名称は、これを最初に唱えた古代ギリシャ人エウヘメロスに由来する。
- 25) Brigit はケルト神話の女神であり、Brigid と綴られる。

Kathleen Hughes, *The Early Celtic Idea of History and the Modern Historian: An Inaugural Lecture*, (Cambridge University Press; Cambridge, 1977) ISBN-13: 978-0521216753 ©Cambridge University Press 1977. Japanese Translation published by arrangement with Cambridge University Press through Yamanashi Prefectural University.